
紫の記憶喪失魔王

Lily

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫の記憶喪失魔王

【Nコード】

N4480V

【作者名】

Lily

【あらすじ】

私と幼馴染が異世界に召喚され、なにかと正義感の強い幼馴染が勇者になった。私？ 私は放浪の旅に出る予定。勇者より早く魔王倒そうかなとも思ってる。

【プロローグ】（前書き）

作者は文才が無いと思っています。
暖かい目で読んでください。

【プロローグ】

【プロローグ】

灯りをともしたランプが高い音を立てて割れ、広間を照らすのは窓から差し込む陽の光だけになった。

私は震える足でなんとかその場に立ち、数メートル離れたところで立つ3人の人間を睨みつけた。

人間は全員息を切らしているものの、私ほどではない。

「止めだっ！」

大剣を構えた人間が、床に散乱している死体を踏みつけながら、私に向かって突進してきた。

それを横に飛んでかわし、まだ温かい死体の上に着地した。

そこへ間髪いれずに、風の刃が飛んでくる。

私はそれを消し、太刀を持った人間の足元から、先の尖った岩を突き出した。

そのままいけば串刺しだったが、杖を持った人間が杖を一振りすると、太刀を持った人間の周りに青い膜が現れ、先の尖った岩と当たってどちらも消えた。

その間に大剣を持った人間は私に接近し、大剣を上から下へ振り下ろした。

私は黒い膜を張り防御したが、紙を切り裂くようにあっさり破られ、肩から腹部にかけて斜めに切られた。

私は仰向けに倒れ、喉元に剣を突き付けられた。

「これで終わりだな、魔王」

大剣を持った人間は笑みを浮かべている。
そりゃあ、嬉しいだろうな。

勇者の存在理由である魔王退治が出来るのだから。
他の2人も集まってきて、倒れた私を見下ろしている。

その蔑むような眼差しが気に入らない。

喉元に突き付けられていた大剣が振り上げられ、真っ直ぐ私の眉
間に向かって落ちてくる。

死ぬことへの恐怖は不思議となかった。

目を閉じ、これから私を襲うであろう一瞬の痛みに身構えた。

だが、痛みは無い。

勇者が痛みもなく殺してくれたのだろうか。

おそろおそろ目を開けると、目の前でふるふると震えている剣先
があった。

剣先はすぐに私の視界から消えた。

「……俺にお前は殺せない」

「は？」

つい素っ頓狂な声をあげてしまった。

他の2人も、信じられないといった顔で勇者を見ている。

「テレポート瞬間移動」

杖と太刀を持っていた2人の人間が消えた。
城外へ出されたのだろう。

勇者が私の額に手をあてた。

「マタンデ空間干涉」

私と勇者の間の空間が捻じれ、歪みが出来た。

私は歪みに引き寄せられ、その中に入った。

歪みの中は見渡す限り灰色の空間で、寒くも暑くもなく、虚無という言葉が似合っていた。

私は歪みの中で、目を閉じた。

私が歪みに吸収された後、勇者は笑みを浮かべて、その場に崩れ落ちた。

【女生徒】（前書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます！

【女生徒】

「きゃああああ！」

悲鳴が響いた。

黄色い声のその悲鳴は私、やつばしおん夜鐔紫苑を夢の世界から現実へと連れ戻した。

さつきのは良く見る夢、いつも剣を突き立てられたところで目が覚めるのだが、今日は違った。

顔を上げて窓の向こうを見ると、ちらほらと雪が降り、地面をうつすらと白く染めていた。

「きゃああああ！」

二度目の悲鳴が響いた。これは事件が起きたわけではない。

私の幼馴染のせいなのだ。

空調の温風を外に漏らさないため、ピッタリと閉まっている教室のドアを勢いよく開け、やや童顔の見慣れた男が入って来た。

髪染めを一回も行っていない真っ黒な髪を振り乱して、私の所に走ってくる。

嫌な予感しかない。

「紫苑！ 帰るぞ！」

「嫌だ」

私は即答した。

この男の名を呼ぶ声がどんどん近づいて来る。

『厄介事は避けて通る』が私のモットーだ。

「問答無用！ 行くぞ！」

幼馴染に抱きかかえられ、急に視線が高くなった。

うわぁ……視線が刺さる。

「隆也くん！」

廊下に出るや否や、女子生徒が追いかけてきた。

私の幼馴染こと橘隆也たちはなりゆっやはかなりの美男子だ。

スカウトされたこともあったし、彼がこの学校に入学したと同時にファンクラブが作られ、こうして毎日私を巻き込んだの鬼ごっこを続けている。

「紫苑！ あいつら止めてくれ！」

「たい焼きおこれ」

すぐに、おごってやるから早くしてくれ、という返事が返ってきた。

「了解」

私は目をハートにして追ってくる女子生徒たちを見て、微笑んだ。彼女たちのおかげで私は今日もたい焼きを手に入れることが出来るのだ。

「<金縛り>」
フィックス

追いかけてくる女生徒たち全員の動きが止まった。

これはたぶん魔法とか超能力とかの類で、知っている人間の中で使えるのは私一人だけ。

何でかは知らない。

「よしっ、いまの内だ！」

そう言っ て隆也はスピードを上げた。

……あ、鞆忘れた。

【召喚】（前書き）

お気に入り件数が2件に！ 感動！

【召喚】

私は鞆を置いて来たことを悔やみながら、熱々のたい焼きをほおばった。

うん、何回食べてもおいしい。

「最近暗くなるのが早いな」

隆也はひときわ大きく見える満月を見上げている。

「冬だからね」

私は素っ気なく答えた。
会話よりもたい焼き優先だ。

「送って行こうか？」

たい焼きから隆也に視線を移すと、頬を赤くしている彼がいた。
ああ、そうか、寒いのか。
私は寒さをあまり感じないので、制服は基本的に夏服とセーターだ。

「いや、いいよ。寒いでしょ？ 早く帰りなよ」

「で、でも、お前一応女なんだし、変質者とかに襲われたり……」

「大丈夫よ、撃退できるし」

隆也の顔が瞬時に青ざめた。

そこまで怖いこと言ったかな？

「冗談だよ」

「あ、ああ。とにかく、俺はお前を送っていく！」

「……わかった」

隆也の顔がまた赤くなった。

お前の血管はどうなっているんだ、と聞きたいところだが、やめておこう。

道路はすでに雪で真っ白になり、月の光を反射して光っているように見えた。

「妖精とか出てきそう」

「子供かお前は」

隆也が突っ込みを入れた。

普段なら立場は逆なのだが、雪を前にするとつい妖精なんて単語

が飛び出してくる。

私は心底雪とファンタジーが大好きなのだ。

『その人』

どこからともなく声が聞こえて来た。

これはまさかの心霊体験ってやつ？ 私ファンタジーは好きだけ

ど怪談は好きじゃないよ？

「……紫苑、早くここから離れよう」

「了解であります」

隆也も私も怪談は嫌いだ。

珍しく意見が一致し、逃げるようにしてその場から走り去った。

『待ってください！』

隣で走っていた隆也が消えた。

振り向くと、隆也の足元で口を開けている灰色の穴から伸びている大きな灰色の手が、隆也の体をつかんでいた。

「うわああああ！」

隆也はそのまま灰色の穴に引きずり込まれた。

そして灰色の手は私に狙いをつけ、うねうねと蛇のような動きで伸び、私の腕をつかんだ。

その灰色の手はかなり大きかったので、私の肩から手首までを握った形で手をつながれていた私も、同様に灰色の空間に引きずり込まれた。

【勇者】

灰色の空間からは、すぐに出れた。

でも、出た場所が悪くて、私は硬い石の地面に激突した。

「大丈夫か紫苑!？」

「お星様が回ってるよ」

誰だ、夜に人を拉致するような輩は!

周りを見廻すと、何10人も白いローブを着た怪しげな集団が私たちを囲むようにして立っていた。

私が今いる建物は石造りの神殿のようなもので、あちこちひびが入って崩れかけている。

「……なぜ2人いる」

さっきの声だ。

「……巻き込まれたのでしょうか」

違う声が響いた。

「そうか」

白いローブを着た人が1人、近づいてきた。

「おい! お前ら誰だ!？」

隆也がここにいる全員に聞こえるように、声を張り上げた。
近くまで来た白いローブを着た人がフードを取り、金髪金目の青年の顔が現れた。

「お初にお目にかかります、勇者様。私はガレス王国第一王子、バイアン・グル・ガレスです。我々にあなたの力を貸してください。そのために召喚いたしました」

「は？ 冗談じゃねえ。アホな宗教団体になんか関わりたくねえよ！ 今すぐ俺を返せ！」

自称王子は困ったような顔をして、隆也の前にひざまずいた。周りの白ローブたちも自称王子にならって一斉にひざまずいた。当然のごとく私は無視されている。

「お願いします。我々にとって死活問題なのです」

こう言われて隆也は困っているようだ。
あいつ正義感強かったからなあ……。
隆也は暫く考え、意を決したようにうなずいた。

「じゃあ、まず俺を外に出してください」

「わかりました」

私たちは石の扉をくぐり、外に出た。
外には草原が広がり、少し離れたところに大きな町があった。
町はともかく、草原は幻ではないだろう。
草の匂いがするし、踏むと感触もある。

「勇者様、お下がりにください」

自称王子が言った。

その視線の先には、犬っぽい生き物がいた。

頭が3つに、人間の2倍ぐらいの体躯、風に波打つ黒の毛並みに、らんらんと輝く3対の赤い目。

殺気に満ちた赤い目が私たちを睨んだ。

隆也も負けじと睨み返しているようだが、如何せん相手の迫力はものすごい。

シルフドラゴン
「<風竜>」

犬もどきの下の地面に、緑の複雑な模様の入った円が現れた。次に犬もどきが浮いたかと思うと、身体がばらばらになった。

【2つの太陽】

犬もどきがばらばらになり、塵となって跡形もなくなった。

「危ない所でした」

自称王子の右手には、赤い石がはめ込んである長い杖が握られている。

さっきのはこいつが起こしたもののだろう。

「さっきのあれは何？」

「あれは魔物です。あなた方の世界にはいないものでしょう」

「じゃあ、あれが浮いたのは？」

「魔法です」

魔法はともかく……魔物は信じられない……。

「隆也、どう思う？」

「俺は……信じる。上見てみるよ」

私は空を見上げた。

そこには、2つの太陽が輝いていた。

1つは弱い光を、もう1つは強い光を放っている。

……私はどうやら別世界に来てしまったらしい。

私たちは今、白ローブの人たちに囲まれて草原を歩いている。

その間王子から聞いた話では、80年前の魔王に人間が勝つて以来、いなかった魔王が現れ、魔物を従えて暴れているらしい。

80年前の魔王を倒した初代勇者とその仲間は今も他界しているから、異世界から新たに勇者を呼ぶことにしたんだとか。
それで白羽の矢が立った勇者様が隆也。

「頑張れ、勇者様」

「さくつと倒して帰る」

幸い、終わったら帰らしてくれるようなのでそこは安心できる。

「着きましたよ、どうぞ中へ」

いかにも中世ヨーロッパという感じの重苦しい城壁の扉が開いた。
このまま王に謁見、という感じなのだろう。

人が沢山いる大通りを抜け、大きな城に案内された。
その間、私たちは注目の的だった。

複雑に入り組んだ城の中を歩き、中庭を通り、やっと王がいる場所の入口にたどり着いた。

中には大臣と思しき人物がざっと30人、左右に分かれて座っていた。

その間に、でっぴりふとった王と、豪華なドレスを着た女王が玉座に腰をおろしていた。

王子が跪くのを見て、あわてて真似をする。

誰かに頭を下げるなんてしたくないが、やらないと不敬罪で死刑もあり得る。

「聡明なる国王にご報告いたします。勇者の召喚は成功いたしました。彼こそ、ガレス王国に平和をもたらすものでしょう」

王子が報告している間、王様は王子を見ていなかった。

玉座が私たちの位置より数段高い所にあるので、首の肉が邪魔で見えないんだろうな。

「ほう……。随分と頼りなさそうだがのう」

黙れ、と呟く隆也の声が聞こえた気がした。

「ならば、その娘は？」

「召喚に巻き込まれたようです」

「ほうほう……」

……王様の舐めまわすような視線が気に入らない。

そんな汚らしい目で私を見るな！ 焼き豚にするぞ！

「娘、歳は？」

「じゅ……15」

「そうか、娘。後でわしの寝所に来るがよい」

「……は？」

王様は私の中の堪忍袋の緒を盛大に切った。

【2つの太陽】（後書き）

感想をお待ちしております

【王殺害未遂事件】（前書き）

総合評価が跳ね上がって感激しております！

【王殺害未遂事件】

「あ、あの。今、なんとおっしやいましたか？」

私の聞き違いであつてくれ、じゃないと、城ごと王様吹き飛ばしちゃうかも。

なぜかこつちの世界にきてからエネルギーに満ち溢れている。

小説とかじゃ異世界人は召喚されたら大抵すごい能力付くしね。

「わしの寝所に来いと言つたのじゃ。ぬしら平民にとっては身に余る光栄じゃろっ」

身に余る殺意覚えちゃうよ。

世の中の女性のために散るべきだこのじいさん。

「<死^{デス}の > むぐっ！」

誰かに口を覆われた。

「落ちつけ紫苑」

隆也が小声で囁いた。

だが声に少し怒りが混じっている。

「落ちつけるか。あのじいさんは世の中の女性のために死ぬべきだ」

「王様殺したら俺ら犯罪者になるじゃねーか」

……確かに、この世界の事何も知らないのに、国を敵に回すのは危険すぎるか。

「……分かったから、手を離せ」

傍目から見たらさぞ滑稽だっただろうな。

私の株が一気に下がった気がする。

「……まあよい。夜には貴族たちへ披露目をする。下がれ」

王子が立ち上がり、礼をした。

私もぎこちなく礼をして、外に出た。

外には本物のメイドさんが2人並んで立っていた。

どちらも同じ顔をしているから、双子だろう。

唯一違うのは、髪型ぐらい。

左の方は青い髪を腰ぐらいまで伸ばしていて、右の方は肩に届くか届かないかぐらいの長さだ。

「私はティナリイです。勇者様の専属メイドになりました」

右の方が言った。

「わたくしはツオルキンです。シオン様の専属メイドになりました。以後お見知りおきを」

左の方は、右の分も貰ったかのような真面目な人ようだ。

ツオルキンが深く礼をすると、王子が「私はこれで」と言い残して去って行った。

私たちは双子のメイドについて行き、王子が行った方向とは真逆

の方向へ歩いて行った。

【説明会】

私たちは客室に案内された。

中は走り回れるんじゃないかと思う程広いし、豪華だ。

私が座っている椅子なんか、飛び跳ねられるぐらい弾力がある。

「では、わたくしから魔物と、魔王について説明させていただきます」

ツオルキンが説明し始めた。

ティナリイはどこかに行っていない。

「魔物は、人の負の感情が集合し、具現化した存在です。魔王は魔物がさらに負の感情を吸収し、大きくなったものです。どちらにも自我は無く、負の感情をそのまま本能としています。普通の武器ではいくら攻撃しても傷つけることはできません」

「じゃあどうやって倒すんですか？」

隆也が口をはさんだ。

「魔法を使う事で倒すことができます。我々の使う武器には全て魔法がかけられていますので、武器の魔力が枯渇しない限り魔物を倒すことができます。現在魔物について分かっているのはこの程度です」

「ツオルキン」。やっぱり駄目だったえ」

間の抜けた声を発しながら、ティナリイが客室の扉を開けた。

「やはり駄目ですか……。勇者様、魔法をお教えするのはピュテ
ィア王女のはずだったのですが、今はとてもお忙しいそうです。代
わりにわたくしたちがお教えます」

「私は？」

「ご希望であれば、お教えます」

「じゃ、お願いします」

「かしこまりました。では、簡単な説明から。魔法には有属性と
無属性があります。有属性は空気中の魔力を吸収して発動しますの
で、周囲の環境によって使える魔法が異なります。例えば、火のな
い場所では火属性の魔法は使えませんし、水のない場所では水属性
の魔法は使えません。無属性の魔法は自身の魔力だけで発動するの
で、魔力の消費は激しいですが、思い通りの現象が起こせます。召
喚の魔法も無属性に入ります」

「思い通りの現象って、どんなことでも出来るんですか？ 人を
蘇らすとか……」

私が口をはさむと、ツオルキンは一瞬嫌そうな顔をした。

「人を蘇らせるには、いろいろと条件がありますが、可能です。
無属性の魔法は、それを実現するだけの魔力があれば不可能なこと
はありません」

ある意味チートだわ、それ……。

「では、実際に使ってみます」

ツオルキンが立ち上がり、手を前にかざした。

「冷たき石よ、我の命に従え。 <石弓>」
ストーンボウ

見た目大理石の天井の表面がぐにやりと波打ったかと思うと、下に伸び、ツオルキンの手に巻きついた。

手に巻きついた大理石は弓を形作っていき、やがて動くのをやめた。

床は弓の分が削られたかのようにへこんでいた。

「これは下級魔法ですが、わたくしは魔力が少ないので詠唱が必要になります。シオン様はともかく勇者様は必要ないと思います。やってみてください。作るものはなんでもかまいません」

今さりげなく馬鹿にされた気がする。

成程、ツオルキンは隆也に惚れたんだろうな。

元の世界でも腐るほどいたな、私を隆也の彼女だと勘違いして嫉妬してくるやつ。

隆也はツオルキンの思いに気付かず、同じように手を前にかざした。

「 <石剣>」
スワード

天井がまた波打ち、隆也の手に巻きつき、剣の形になった。

「すげえ……紫苑もやってみろよ」

「ふつ、腰ぬかすなよ？」

ツオルキン、剋目せよ！

【魔法】

私は少し離れたところに火を発生させ、大きくして西洋風の竜の形にした。

もちろん部屋の中を燃やさないようにしてある。

「無属性魔法……」

ツオルキンは目を見開いて竜を見ている。

まさか元の世界にいた時の魔法もどきが本物の魔法だったとは、私もびっくりだ。

「どこで使い方を？」

「さあ？」

ツオルキンは私を睨みつけてくるが、答えられないんだからしょうがない。

私もどこで知ったかなんて覚えてない。

「つ、続きは明日にします。夜にはお披露目がありますので、準備をしていたいただきます。ティナリイ、勇者様をお願いします」

「はい」

ティナリイが敬礼のポーズをとった。

「準備って何するの？」

「服選びと、お化粧ですね」

私の問いかけに、ツオルキンが答えた。

ツオルキンはどこか楽しそうだが、私は顔が強張っているのを感じる。

私はその強張った顔のままツオルキンに連れて行かれた。

肌が弱いから化粧したら肌が荒れるんだよう。

ツオルキンに案内された部屋は客室でとても豪華だったが、急いで用意した跡が見受けられた。

私も一緒に召喚されることは予想してなかったんだろうな。

「お召し物はどれになさいますか？」

ツオルキンはいつのまに持ってきたのか、何枚もの服をベッドの上で広げた。

どれもこれも派手すぎる。

世界史の教科書で見たような気がするなあ……と思っていたと、端の方に小さく置かれている服が目に入った。

丈がちよっと短いのが気になるけど、刺繍も飾りもそんなにない黒いワンピースだ。

よし、これにしよう。

「それになさいますか」

「うん」

「では、お化粧の方を」

「断固拒否する」

「お化粧」

「拒否する」

「……」

「……」

私とツオルキンはしばらくお互いを睨みあつた。
この人はなぜそんなに化粧をしたがるんだ！ 化粧魔か！

「……では、私は他の服を置いてきますので」

とうとうツオルキンが折れ、ベッドの上の服をかき集めて、部屋から出て行った。

私は制服を脱いで服を着てみた。
意外とかわいい。

部屋のドアがノックされ、ツオルキンの声が聞こえてきた。

「失礼します」

「えーっと、ツオルキン……さん、これでいいかな？」

「はい、よろしいです。では、わたしについて来てください」

私はツオルキンから少し距離を取って進んだ。

おかしな真似をしたらすぐ動けなくするためだ。

だが、何事もなく目的の場所に着いた。

体育館の2倍くらいありそうな大きな会場で、踊っている人が沢山いる。

ツオルキンが私を席まで案内した。

王族と勇者一行だけ座れるようになっていて、私の席は王様のすぐ右隣。

ツオルキンの話では、本来王様の右側には2人の王子が座るが、今回は特別で、王族は入り口から見て左側に集められ、右は勇者一行らしい。

……なら、隆也を王様の隣にしてくれよ。

後悔してももう遅い。

今更気分が悪いなんて言っても、部屋に帰らしてくれないだろう。やっぱり城吹き飛ばした方が良かったかな……。

【魔法】（後書き）

感想をお待ちしております

【魔物襲来】

隆也はもう来ていた。

私と同じような飾り気のない黒い服を着ている。

やっぱり勇者もあの美的感覚にはついていけなかったか。

私が椅子に座ろうとすると、1組の男女がやって来た。

「やあ、君が勇者様かい。僕はロックス・グル・ガレス。第2王子をやつてる」

目当ては隆也、当然か。

金髪で切れ長の赤い目に、180センチはありそうな長身だ。

その後ろから、第2王子を押しつけて、青い目と青い縦ロールの女の子が隆也と第2王子の間に割りこんだ。

「勇者様、わたくしは第1王女ピュティア・グル・ガレスですわ。勇者様はとっても素敵なお持ちですね。深い黒の持ち主はそうおりませんの。だから、わたくし……」

第1王女は1言言うごとに隆也に詰め寄っていく。

「わたくしはあなたが……」

最後まで言い終わらないうちに、王女は第2王子に連れて行かれた。

ツオルキンだけじゃなく王女も落とすとは、隆也の顔はどこにいても凶器になる。

「いつそ仮面でも被れば？」

「コスプレの趣味は無い」

疲れた様子の隆也に冗談を飛ばしたが、隆也は深くため息をついて椅子に座った。

しばらくして、女王がコホン、と咳払いをすると、王様が何人もの従者に支えられて立ち上がった。

うん、まさに豚だ、それも特大。

「えー。皆の衆。我々は、勇者を召喚することに成功した。今宵は、それを祝うための宴。存分に楽しむがよい」

「大変です！ 中庭に魔物が攻めてきました！」

王様がまた何人もの従者に支えられて座った途端、会場に騎士の格好をした男が入って来た。

鎧はぼろぼろで、体のあちこちから血を流している。

魔物、と聞いたパーティの出席者たちがパニックを起こし、我先にと他人を押しつけて逃げようとする。

王様もあわてふためいて椅子から転げ落ちた。

動じていないのは王子2人と王女だけのようだ。

「……勇者様の出番か」

隆也はゆっくりとした足取りで傷ついた騎士の所へ歩いて行った。

「おい、剣を貸せ」

傷ついた騎士は隆也に剣を渡し、その場に座り込んだ。

「中庭に魔物が……」

「中庭だな、分かった」

隆也が中庭の方へ走って行った。
なんか返り討ちにされそうだな。
面白そうだし、見に行ってみよう。

【魔物襲来】（後書き）

感想求む！

【不意打ち】

中庭では、青い巨大な鳥と隆也が交戦していた。飛んでいる青い鳥の方が優勢だろう。

助けようかと思ったが、さすが勇者というべきか、隆也が青い鳥の右翼を切断した。

青い鳥は地上に落ち、あっさり隆也に首を切られた。首を切られた青い鳥は、塵となって消えた。

魔物というくらいだからもうちよつと粘ると思ったけど、意外とあっけなかったな。

「おい！」

声をかけると、隆也がこちらを向いた。その顔は青ざめている。

「大丈夫か？ 顔色が悪いぞ？」

「吐き気がする……」

隆也が口に手をあてて、地面に膝をついた。

「こ、ここで吐くなよ！？ ちょっと、誰かこいつ連れてって！」

中庭の端の方で怪我人の治療をしていた騎士たちに呼びかけた。騎士の1人が私に気付き、走って来た。

騎士が隆也の前でぶつぶつと何か呟くと、隆也の真下に複雑な模様の入った緑色の円が現れ、隆也の身体が浮いた。

そのまま隆也はどこかに連れて行かれ、私は取り残された。

……お披露目はもうお開きだろうし、部屋に帰ろうかな。
足を前に踏み出した時、腹部に痛みが走った。
見てみると、鎌のような曲がった刃物が身体を貫通して突き出ていた。

「キシヤアアアア！」

背後から声がした。

息がうなじの辺りに当たって気持ち悪い上に、腐った肉みたいな臭いがするからたまったものじゃない。

おそらくこいつは魔物で、隠れていて今出てきたんだろう。
こんな臆病者はぱっと倒しちゃおう。

「アイシクル
く氷柱>」

氷柱が肉を貫く音がして、私の身体に突き刺さっていた鎌が塵と
なって消えた。

後ろを振り向いてみると、鎌の持ち主はとうに消えていた。
鎌持ってたし、死神みたいな奴だったのかな。

魔物につけられた傷は不思議と消えていき、痛みもなくなった。
なんかどんだん人外に近づいていつているような気がする。
まあいつか、部屋に帰ろ。

帰ったら、隆也あての手紙を書こう。
旅に出る　と。

【不意打ち】（後書き）

宿題が終わらなくて現実逃避……

【置手紙】

俺はふかふかのベッドの上で目覚めた。

昨日の事を思い出して少し気分が悪くなる。

魔物を倒した後、俺は医務室に連れて行かれ、吐き気と格闘した。医者のおっさんが言うには、俺は負の感情に当てられたらしい。慣れればこういうことは無くなるんだとか。

でも結構時間かかるだろうな……早めに魔王倒したいんだけどな。ついため息が出てしまう。

いやいや、弱気になっていてはだめだぞ俺！ 帰ったら絶対……絶対紫苑に

「おはようございます。今日もいいお天気ですね〜！」

ティナリイが部屋に入って来た。相変わらず間の抜けた喋り方だ。

「間の抜けたとは失礼な〜」

心が読まれた！？

「私のスキル<精神感応>でだいたいの感情は分かります〜」

「スキル？」

「才能みたいなものですね、因みにツオルキンのスキルも<精神感応>です〜」

ほー、便利だな、俺にもあるのかな？

「人間は絶対持つてますよ。勇者様のスキルは代々＜破魔＞ですので、勇者様もそうかと」

「＜破魔＞？」

「魔法を消しちゃうスキルです。魔法を使う魔物は多いので有利だと思いますよ」

「成程……」

「勇者様！ シオン様のお部屋に置手紙が！」

扉を勢いよく開け、ツオルキンが部屋に飛び込んできた。

「置手紙？」

「は、はい。わたくしには読めなくて……」

そう言ってツオルキンが紙きれを俺に渡した。紙きれには日本語で、

『旅に出る。心配するな』

と書かれていた。

【置手紙】（後書き）

あと4日で学校なんてありえないっ！

【偽造】

あんな変態王のいる場所にはこれ以上いたくかったので、朝方城からこっそり抜け出し、今は城下町にいる。

持ち物は今着ている制服とわずかな金のみ！ 鞆は学校に放置されたままさ！

なぜ制服で来たのかというと、あんな派手な服着てたら間違いくお偉いさんと勘違いされるから。

金は昨日の黒い服を売ってゲット。

さてギルドでも探しますか。

「すいませーん。ギルドってどこにありますか？」

武器を売っているお兄さんに話かけると、お兄さんは怪訝そうな顔をして私を見た。

「ぎるど？　なんだそれ？」

「えっ？」

「そんなものは聞いたことがない」

……軽くカルチャーショック。

異世界にはギルドがある、という私の考えは間違っていたのか！？ いや諦めるな私！ この人が知らないだけで実際はあるはずだ！ お兄さんに礼を言い、他の人にも聞いてみた。だが、帰ってくる言葉はみんな同じ、「そんなものは聞いたことがない」という言葉。

10人目に聞いた後、私はある結論に至った。

魔物は殺されれば塵となって消える。
消えてしまえば倒した証拠が得られない。

倒したと嘘をつくやつも少なからず現れることだろうし、嘘か本当かを見分けなければ報酬は支払えない。

故に、それではギルドとして機能しないだろう。

ギルドが無くては、護衛などは騎士に頼めばいいのだ。

ギルドが無い分人数がいるだろうし。

「私はどうやって生活費を稼げば……」

城に帰るのは駄目だ。

旅に出ると書置きしてあるし、私のプライドが許さない。

ならば残る手段はただ一つ、金の偽造だ。

私の良心が騒ぎ立てるが、こんな時に魔法を使わなければいつ使うのか！

人気のない路地裏に入り、服を売って手に入れた金をじっくりと見る。

銀貨には冠をかぶった男性が、銅貨には同じく冠をかぶった女性が彫られていた。

どこことなく第2王子と王女に似ている。

「フォルゲく偽造>」

同じ硬貨が次々と虚空から現れ、城の部屋から拝借した袋の中に入っていく。

ふふっ、億万長者になれるかもしれないぞ！

「偽造現場発見」

背後から声がした。

【偽造】（後書き）

感想求む！！

【発覚】

「偽造現場発見」

背後から声がした。

後ろを振り向くと、黒ずくめの怪しげな人間がいた。
フードを深くかぶっているから性別も分からない。

「騎士に突き出そうかな？」

「それだけは勘弁願います」

「嫌だと言ったら？」

「<記憶削除>」
メモリーデリート

「<拒絶>」
リジェクト

ふむ、脳に直接干渉するのは難しい。
あっさりかき消された。

「いきなりだね、脳に干渉するなんて廃人になったらどうしてくれるんだよ」

「どうもしない」

「ははっ。おもしろいね、君。どうだい？ 僕たちの仲間にならないか？」

「……何の仲間？」

「『魔王研究所』の仲間にさ！」

「『魔王研究所』？」

「そうさ！　僕はその研究員、デルフィだ」

黒ずくめがフードをとった。

黄緑色の髪と、同色の瞳、この世界の美的感覚は分らないけど、美男子に入る顔立ちだろう。

「さあ、君も魔王の謎を解いてみたいと思わないか！？」

しかし、異様なテンションの高さが、悪い印象を与えていた。でも研究テーマは魅力的だ。ぱぱっと倒せる裏ワザみたいなのが見つかるかもしれない。

「よし、仲間になろう。案内して」

「じゃあ」

突然、デルフィが消えた。

始めからそこにいなかったように、忽然と姿を消した。

次の瞬間、後頭部に硬いものが当たり、私は意識を手放した。

【魔王研究所】

何か変な音が聞こえる。

目をうつすらと開けると、黒ずくめの人間たちが動きまわっているのが見えた。

黒ずくめってことは、ここは『魔王研究所』なのか？

しかし気絶させられて拉致されるなんて思ってたなあ……。身を起こし、周りを見廻した。

私がいるのは真っ暗な部屋で、窓が無いし、カビ臭いから多分地下だろう。

蠟燭の灯がともされ、デルフィの顔が浮かび上がった。

デルフィは私の前に立ち、両手を上げて、何か呟いている。目は焦点が定まっておらず、虚ろだ。

「デルフィ、どういうことだ？」

「もう少しだ……」

「人の話を聞けっ！」

殴りかかろうとすると、デルフィの顔面に当たる直前に、突然現れた黒い膜のようなものに阻まれた。

手を離すと、また見えなくなった。

ここは真っ暗だから、闇属性の魔法だろう。

そっちが魔法を使うなら、こっちも魔法を使わしてもらおうじゃないか！

「<暗黒の刃>！」
ノクテス

闇が凝縮されたかのような真っ黒な刀身のみを八方に出現させ、飛ばした。

黒い膜に当たった時に多少抵抗があったものの、簡単に破れた。黒ずくめの人間たちは悲鳴を上げて、部屋の扉を開け、一斉に階段をのぼりはじめた。

「フィックス金縛り>」

デルフィ以外の黒ずくめたちの動きを止めた。階段をのぼっている途中だったから、転げ落ちるやつが沢山いたが、無視だ。

目の前で腰を抜かしているデルフィ君に話を聞かなきゃなんないからね。

「おい、デルフィ、どういうことだ？」

デルフィは答えず、口をパクパクさせている。

「おいっ！」

怒鳴ると、デルフィは肩をびくつと震わせた。

「うつつ嘘だ！ あの結界は研究員全員で、は、張ったはずなのに！ なな、何者なんだ！？」

あの黒い膜は結界だったのか。

呂律の回らないデルフィを入れて、研究者たちの頭数はだいたい20。

20人がかりで結界張って簡単に破られるってどんだけ弱いんだよ。

「私が何者かはどうでもいい。何をしようとしてたのか教えろ」

「ま、魔王を、作ろうとしてたんだ」

「魔王を作る？」

「魔王は人の負の感情で作られる。なら、負の感情を集められればっ、魔王を人工的に作れるはずだったんだっ！」

「……それで、何で私を拉致した？」

「ヒトが負の感情に取り込まれればっ、魔王化するはずなんだっ！
僕はそれを再現しようとしていたんだっ！」

つまり、私は実験体にされそうになったのか。
腹が立つのは悪いことではないだろう。

だが、それと同時に、意識が遠のいて行っ

【魔王研究所】（後書き）

明日から学校なんて早すぎる……

【確信】（前書き）

お気に入り登録件数が減った……
なにが面白くないのか教えてくれ！

【確信】

デルフィは、自分の前で険しい表情をしていた少女の魔力が、より危険で凶暴なものに変わったことを本能的に感じた。

逃げなければ、逃げなければ殺される。

だが足は凍りついたかのように動かない。

少女は僕を見つめ、真一文字に結ばれた唇を歪めた。

「あはははははっ！！ 魔王を再現？ くだらない。あれを繰り返す気なら、私は容赦しない。あの苦しみをもう一度私に課そうとするなら、私はお前を殺す」

少女から発せられた殺気が、僕を気絶寸前まで追い込んだ。

気絶させることはこの少女にとって容易いことだろうけど、あえてしなかった。

僕を……苦しめて殺す気なんだろう。

でも、僕は無属性魔法を操れるトップクラスの魔法使いだ。

僕の全魔力をぶつければ、逃げるチャンスくらいは作れるはず！

僕は狂ったように笑う少女から目を離さずに小声で詠唱し、魔法を発動した。

「エクスプロージョン
く爆発>!!」

大規模爆発を起こし、少女にダメージを与えると同時に天井を壊し、少女が僕に接近するのを防ぐ。

少女はあの結界を破るような魔法使いだ、勝とうなんて思っちゃいけない。

僕はいまだ硬直している仲間たちの間をすり抜け、地上に出た。だが、そこには少女の姿があった。

「逃げるなんて、許さないよ……」

少女が僕の頭を鷲掴みにした。

少女とは思えない力に、僕の頭がみしみしと悲鳴を上げる。

「「ロシムン」
腐蝕」

少女がそう呟くと、指の先や足の先から、感覚がどんどん無くなっていく。

首から下の感覚が無くなり、やがて僕の意識もなくなった。

意識が無くなる直前に、僕は確信した。

僕の実験は失敗ではなかった。

紫の髪を風に揺らし、紫の瞳で僕を見ているこの少女こそが、僕が作ろうとした魔王、僕が作った魔王だったんだ。

【昔話】

俺は紫苑の書置きを片手に、その場で硬直していた。
ツオルキンが声をかけてくれなければ、そのままだっただろう。

「勇者様、シオン様はなんと？」

「……旅に出る、だそうだ」

重い沈黙が部屋に訪れ、それをティナリイが破った。

「シオン様ってどんな方なんですかあ〜？」

空気の読めないティナリイの発言に、双子のツオルキンでさえため息をついた。

「あつ、すいません〜。無属性魔法を簡単に使ってたし〜、魔物だつて1人で倒してたから気になっちゃいました〜」

「魔物を1人で倒した？ 昨日のは俺が倒したぞ」

「あの怪鳥とは別に、違う魔物がいたんです〜。不意打ちを仕掛けたみたいですけど、シオン様がつかい氷柱で倒しちゃったんです〜。勇者様が医務室に運ばれた後でした〜。あつ、話がそれちゃいましたね〜。シオン様の昔話聞かせてくださいっ」

ティナリイがものすごく期待の眼差しを向けてくるので、俺は渋々紫苑の昔話をした。

「俺の家と紫苑の家……橘家と夜鐔家は仲が良くてな、よくお茶会みたいなことしてたんだ。俺が5歳ぐらいの時、夜鐔家に招待されて、俺は庭で遊んでた。そしたら、空から紫苑が落ちてきたんだ」

「おとぎ話みたいですね。続けてください、勇者様」

「……紫苑は、落ちたときに頭を打ったのか、それ以前に失くしていたのか、記憶が無かったんだ。どこから来たのかも、言葉も、自分の名前さえ覚えていなかった。俺と同じかそれより小さかったし、血だらけだったから、夜鐔家が紫苑を保護した」

「じゃ、じゃあ、名前って勇者様がつけたんですか？」

「いや、紫苑の母親だ。髪も目も紫だったから、紫苑って名前にしたらしい」

ティナリイが首を傾げた。

ああ、こっちに漢字は無かったな。

説明してやると、ティナリイもツオルキンも感嘆の声を上げた。

「……では、無属性魔法の使い方はどこで……？」

ツオルキンが口を開いた。

「多分、記憶を失う前に習うか何かしたんだろ」

「……そうですか」

習うと言っても、元の世界で魔法を使える人間が紫苑以外にいたらびつくりだけだな。

あの力があれば世界征服ぐらい出来るだろうし。

それにしても、なぜ紫苑は旅に出たんだろう。

俺に愛想尽かしたとか……？ いや、それはないと信じたい。

魔王倒してさっさと迎えに行くか。

【街の外】

遠のいた意識が戻って来た。

2つの太陽の下、私は立っていた。

いつの間に地下から出てきたのだろうか？

足元から伸びている地下室への階段は、土と瓦礫で埋まっていた。私がしたものじゃないだろう。

となると、デルフィか他の誰かがやったということになる。

一体誰が？ …… まあいいや、さっさとこんな場所からはおさらばしよう。

何も無くなっているものはないし、城下町から外に出てみよう。

城壁を魔法で飛び越え、外に着地。

私は身分証明書みたいなのは持っていないし、門番と揉めたくないから門は通らなかった。

外には見渡す限りの草原が広がり、心地よい風が草を揺らしていた。

特に目的はないので、門番が見えなくなった所で踏みならされた道を歩く。

道を歩けば遭難することはないし、いつかは村や町にたどり着けるだろう。

陽が地平線に沈み始め、そろそろ野宿の準備をしようかなと思っ
ていたら、黒い狼の群れに囲まれた。

否、こいつらは狼と呼べない。

顔が人間だったり、足が人の手だったり、人の身体の一部が混
じっている。

元は人の感情だから、昨日の青い鳥のように動物そのものの姿を
している方が珍しいのかもしれない。

人間のような奇声を発しながら襲いかかってくる人狼の群れを、
土属性の魔法で作った鞭で叩いていく。

鞭なのは使いやすいから、変な趣味はないよ？

とにかく、鞭で人狼たちを叩いていく。

叩かれた人狼は、パシユツという音を立てて消えていく。

まるでゲームのように、血が出ることも、悶え苦しむこともなく
塵となる。

私としてはありがたい、血が吹き出て苦しまれちゃ、罪悪感で1
週間は落ち込む。

30匹はいた人狼の群れを消し、道からそれで野宿の準備を始め
る。

準備といっても、魔物が私の睡眠を邪魔しないように結界を張る
だけ。

歩きながら練習して、使えるようにはなった。

場所と入出の条件を指定して、文字通り張るイメージで使う。

場所は私が寢床に選んだ草の上、条件は私だけが入出できること。

また拉致されるのはごめんだ。

膜のような、薄く黒みがかった結界を張り、草の上に寝転ぶ。

空には雲はなく、満天の星と、淡く光る月だけ。

ふああゝ、眠くなってきたな。

おやすみなさゝい。

【子供】

眠気がだんだんとさめていき、目を開けた。

ちようど2つの太陽の小さい方が、地平線から出るところだった。異世界に来て2回目の朝が来た。

地面で寝るのには慣れていなかったが、身体の節々は痛くない。

私の寝相が素晴らしく良かったという事だな、うん。

起き上がって伸びをすると、見たくないものが見えてしまった。

猿のような生物が一匹、結界ぎりぎりの所で座っていた。

顔は人間のもので、目は釣られた深海魚のように飛び出して、鼻が無く、口からは腕が垂れている。

魔物だ、絶対魔物だ。

こんなのが普通の動物なんてありえない。

結界があると言っても、私から2メートルほどしか離れていない。魔物のあまりの気持ち悪さに目をそらすが、そいつは私の視界に必ず入るように移動する。

たちの悪さといい、この気持ち悪さといい、この魔物は一体どんな感情が元になっているんだ？

「キラ……イ。クライ……クライ」

魔物の口が動くことに、飛び出している腕に歯が食い込み、血が流れた。

……血？ 魔物って血が無いんじゃないっけ？

ということはこいつ動物！？ いやだあああ！ こんな動物いてたまるか！

「スワードく土剣>!!」

土を剣の形にして握り、それを横に振った。

謎の腕より少し上を切り離すと、下も消えた。

だが、謎の腕の持ち主であろう子供が倒れていた。

うつぶせに倒れていたのをひっくり返し、魔物じゃないか確認する。

よし、ただの人間だ。

私は子供の腕の傷を魔法で塞ぎ、意識が戻るのを待った。

暇なので、子供の肩まである銀髪をいじっていると、子供が目を開けた。

「ま、魔物は……？」

「私が倒したよ」

「あ、ありがとうお姉ちゃん」

子供が頭を下げた。

「どういたしまして。あんた何で魔物の中にいたの？」

「ぼ、僕、食べられちゃったんです」

「そ、そう」

生き物じゃないのに食べるのか。
魔物って奥が深いな……。

「あんた王都から来たの？」

「はい。僕のお父さんは商人で、昨日王都を出たんです。でも夜に魔物が襲ってきて、はなればなれになったところを食べられたんです」

「商人か……。じゃあ、お父さんの所まで送ってあげるか、私をしばらく旅に同行させてくれないかな？」

「はっ、はい！　お願いします！」

……ちゃんと伝わったかどうか不安だが、同行くらいさせてくれるだろう。

私は子供と共に、また道を歩き出した。

【商人】

子供の名前はサロ、名字を持っているのは貴族や王族だけのようなので、彼には名字が無い。

彼は彼の両親と商売をしていて、王都から二又スという港町に布を売りに行く途中で魔物に襲われたらしい。

「布を売りに行くってことは服も売ってるの？」

さすがにいつまでも制服じゃられない。

サロの服装を見る限り、城で着たような派手な服は上流階級の人が着るもので、平民が着るものは質素で動きやすいもののようだ。

「売ってるよ。そういえばお姉ちゃん変わった服着てるね。外国の人？」

「……まあ、そんな感じ。国って他にどんなのがあるの？」

「僕たちがいる大陸は全部ガレス国のもだから、外国は海の向こうにあるんだ。遠いし、魔物がいるから海を渡る人なんてほとんどいないから、どんな国なのかは分からない」

「ふーん。ここって結構大きい国なんだな……」

王の首飛ばしてなくてよかったと、心の中で安堵した。

それにしても、サロの両親はどこにいるのだろうか。

結構な距離を歩いたし、そろそろ人影が見えてもいい頃なのだが。

さらに歩いたが、人っ子1人見つからない。

魔物の襲撃も何度かあり、太陽も傾き始め、半ば諦めかけていた時、明かりが見えた。

火を焚いているのだらう、3つの人影が見える。

「お父さん！ お母さん！」

サロが人影に向かって走って行った。

サロは両親と抱き合い、感動の再会を果たしたようだ。さて、早速交渉せねば。

「こんばんは」

笑顔を顔に張り付け、サロの父親に挨拶した。

銀色の長髪を後ろで縛り、顔はサロと良く似ている。

母親の方は号泣して、後ろの人物はほっとしたような表情を浮かべていた。

「お父さん、このお姉ちゃんが僕を助けてくれたんだ！」

おお、サロは意外と気がきくね。

これで好感度アップかな？

「息子を助けていただいて……ありがとうございます！」

「どういたしまして」

サロの父親が頭を下げた。

私がああ気持ち悪い魔物を斬つたら、サロが出てきたってだけなんだけどね。

それにしても、サロは食べられたのによく生きてたな。

「お名前は？」

「紫苑です」

「ありがとうございます、シオンさん。ぜひお礼をさせてください」

来たっ！ チャンス到来！

「じゃあ、しばらく私を旅に同行させてくれませんか？ あ、手伝いとかもしますよ」

私がそう言うと、サロの父親は驚いたようだった。

「そ、それでいいんですか？」

「はい」

サロの父親は、本当にそれでいいんですか、と何度も聞いて来たのだが、それでいいですと答えておいた。

護衛もまともに雇えない商人から絞るとる程、私は悪人じゃないよ。

「……わかりました。シオンさん、我々はあなたを歓迎します」

よし、これで旅の仲間ゲット！

【食文化】（前書き）

テスト・文化祭・台風と三重苦のおかげで遅れてしまいました。

【食文化】

朝起きて、気がついた。

お腹が全然すいていないのだ。

こっちの世界に来て4日、水さえ飲んでいないのに、空腹感を感じたことはない。

そういえば、大事なタンパク源の動物を見たことがない。

魔物なら腐るほど見てきたけど、動物は一回もお目にかかったことがない。

人間生きてる限りは何かを食べているはずだ、それが何なのか分からないが。

サロの両親はサロと話をしているので、ぼつんと1人で本を読んでいる人に聞いてみた。

名前はゼルウィガーさん、この人は雇われた護衛だ。

他にも四人いたのだが、サロを食べたのと同種の魔物に殺されたらしい。

静かに本のページをめくっているその男性は、神父っぽい格好で、金色の長髪を後ろで一つにしばっている。

昔はモテたであろう初老の人だ。

「あのー……ちょっといいですか？」

「シオンさん、でしたね。私に何か用ですか？」

「えっと、ちょっと聞きたいことがあって」

「私に答えられることなら」

隣に座ってみたが、なんとなく話しづらい。

初老の人とは、あまり話したことがないのだ。

両親は共に30代で、おじいさんやおばあさんはいなかった。

「……この国の人って何食べてるんですか？」

「おや、シオンさんは外国の方でしたか。この国の人間は皆、魔力を食べているんです」

「魔力……ですか？」

「はい。シオンさんの国はどのような食文化を？」

この質問に、異世界から来た私が答えていいものなのだろうか。この国の人間だけじゃなく、世界中の人間が魔力を食べているだろうし。

黙っているのも変なので、適当にご飯やみそ汁などを紹介した。

「素晴らしい。それなら魔物も生まれないでしょうね」

魔物？ 食とはかけ離れた単語が出たぞ。

「詳しい理由は分かっているのですが、魔物の負の感情は、人間の魔力そのものなんです。ですから、人間が魔力を食べることで魔物を生み出していると考えられています」

人間が絶滅しない限り、魔物つていなくならないんだな。じゃあ魔王を倒しても、時間が経てばまた生まれるのか。この世界って結構厳しい世界なんだな。

【別れ】

私が旅に同行させてほしいと言ったのは、服を手に入れるためと魔王の居場所という情報を手に入れるため。

魔法使って情報を仕入れることも出来ただけど、知恵熱とか出そうだからやめた。

やっぱ人に聞くのが一番だよ。

魔王は『魔の森』と言う場所で普段はいるらしいと、ゼルウィガーさんに教えてもらったから、次は服だ。

というわけで、サロの母親に商品をみつくるってもらった。

5分後、私は諦めた。

サロの母親の服装を見て、もしやとは思ったが、どの服も城で着たような派手な服なんだよ。

材質はやっぱり違うんだろうけど、問題はそこじゃない。

なんで女物の服はこんなに派手なんだよっ！　いつまでたっても制服のままじゃないかっ！

男物の服も見せてと言ったが、女が男物の服を着ていると、レズだと勘違いされると言われた。

なんで男装したらみんなレズなんだよっ！　おかしいよ！　ズボン穿かせて！

……もういいさ、魔法使えるから制服がいくら汚れても大丈夫なのさ。

とりあえず下着をいくつか買って、亜空間に入れる。

やってみたら出来たんだよね、亜空間。

それを見たゼルウィガーさんはしばらく安心してたけど。

その顔がおもしろくて、もっと驚かせようと荷台のスピードを速くしたら、あっという間にニヌスに着いた。

ニヌスは港町というより、漁村だ。

磯の匂いが漂っている。

私が驚かせようとしたゼルウィガーさんは、漁村の入口辺りで呆けていた。

サロたちとは、私がこれから向かうアテカとは別の町に行くので、さつき別れた。

ゼルウィガーさんは雇われているので、サロたちについていく。意外と短い付き合いだったな。

「ゼルウィガーさん。そんなに呆けてたら、置いていかれますよ」

「……シオンさんは、もしかして勇者ですか？」

「違いますよ」

多分勇者より強いだろうけど。

「そうですか……では、ごきげんよう」

そう言うと、ゼルウィガーさんは足早に去っていった。

さて、これからは1人旅だ。

ちよっと寂しくなるけど、多分どこかで隆也に会うだろう。

あいつも魔王を倒しに行くんだし。

【憶測】

まだ陽が高かったが、私は二又スで宿を取った。
制服も洗いたいしね。

金はばれないように不可視の結界張って偽造したからたくさんある。

え、なに？ 悪いことだつて？

ふん、偽造した金を見破れない店員が悪いんだよ。
というわけで部屋借りました。

石造りの小さな部屋で、簡素なベッドとテーブルが一つずつある。

さつそく制服を脱いで、ついた汚れを魔法で落としていく。

やっぱ野宿だと土がつくんだよね。

スカートも汚れを落とし、ついでにしわものばす。

クリーニングしたてのようにきれいになった制服を着て、ベッドに潜り込んだ。

下着だけで寝るなんてありえないからね……。

私はしばらくベッドの中で、元の世界に思いを馳せていた。

父さんと母さんは元気かな、私と隆也が衝撃的な出会いをしたあの庭はきれいなままかな。

そういえば小さい時の私は、なんで落ちてたんだろ。

今まで何度も自問してたけど、結局答えは分からずじまい。

可能性としては、誰かに投げられた、飛行機から落ちた、魔法を使った。

うん、魔法を使った、以外はありえないね。

投げられたくらいで記憶喪失なんてないだろうし、飛行機から落ちたら間違いなく死んでる。

でも何で魔法を使っただろうな、何で魔法使えたんだろうな。

あ、この世界から来たとか？ ありえない話じゃないしね。

召喚が出来るなら逆にあっちにもいけるだろうし。

おお、今までのどの説よりも有力だ！　じゃあ、血縁者がいるんじゃないか！？

よし、紫色の頭探そう！　元の世界に帰るのはその後だ！

別に魔王倒さなくても魔法で元の世界に帰れるかもしれないしね！

心の中でガッツポーズをとり、私は眠りについた。

【アテカ】

朝起きて地図を買って、『魔の森』への最短ルートを出すと、アテカ村、フォルグ町、ナバユ村を通るのが一番早いと分かった。善は急げと言うし、早速アテカに向かった。

道中は魔物に襲われる以外なにもハプニングがなかった。

小説とかの異世界ならもっといういろいろハプニングあるのにね。

そして、昼くらいにアテカに到着。

山村で、いかにも過疎化が進んでいます、みたいなさびれた村だった。

外に出ている人もほとんど老人だし、村に活気がない。

とりあえず、紫の頭探しに村に入ってみた。

一番近くにおばあさんがいたので、そのおばあさんに紫の髪もしくは目の人がいないか聞いてみよう。

「こんにちは」

「ああ、こんにちは」

こちらを向いた途端おばあさんが固まった。

そしてわなわなと口を震わして、叫んだ。

「魔王だーっ！」

おばあさんは叫んだ後、私に訳を聞く時間も与えず、一目散に走り去った。

「……………どういうこと？」

すぐに、じいさんばあさんが一斉に家から飛び出してきた。
全員老人には似合わない、ナイフやこん棒など様々な武器を持っ
ていて、魔王だ、殺せ、などの物騒な囁きが耳に入る。

これはどう考えても、歓迎されてるわけではないようです。

「魔王！　なぜここに来た！？」

「まだ殺し足りないって言うの！？」

どこかから声が上がった。

「えーと……私は魔王でも魔物でもないし、人を殺したことはな
いんですけど」

私がそう言うと、罵詈雑言が飛び交った。

……これってキレていいんだよね？

人の顔見ていきなり魔王だなんて言って、拳句の果てに鬼畜だの
悪魔だの言って。

私を怒らしたら怖いんだぞ？

「ナイトメア
＜悪夢＞」

老人たちが全員倒れ、寝言で殺してくれ、やめてなどの声がハ
モニ―を奏でた。

ふん、苦しむがいいわ、愚者どもめ。

あれ？　なんか心にもないこと言った気がする。

……まあいいか、さっさとこんな村から出よう。

見たところ紫の髪も目もなかったし。

【再会】

アテ力を出てしばらくすると、魔物に遭遇した。
ちなみに私はすぐ苛立っている。

魔法ですべて消し去った。

目の前にいるものが最初からいなかった、とイメージするのは案外難しいので使わなかったが、今の私なら魔王だっていなかったことに出来るかもしれない。

その後、2度魔物に出会ったが、それも消した。

陽が落ち、山を越えて苛立ちが落ちついて来たところで、町が見えた。

王都ほどではないが、結構大きい。

それに明るい。

祭りでもやっているのだろう、人の歓声が聞こえる。

祭りといっても、おなじみの唐揚げやかき氷があるはずないし、精神的に疲れているので、宿を探し、中に入った。

受付の前には、黒髪の男がいた。

そいつが振り向き、やや童顔の見慣れた男の顔が現れた。

「隆也……？」

隆也が呆けているので、顔の前で手をひらひらしようと近づくと、いきなり抱きしめられた。

「紫苑！」

抱きしめられている事を除けば感動の再会なのだがな、隆也君。私はたとえ幼馴染が相手でも、セクハラは嫌いなのだよ。

「離れ
」

「離れてください！」

私の声が誰かに遮られた。

右の方を見ると、顔を赤くしているピュティア王女がいた。

その後ろにはロックス王子と、ティナリイがいる。

いやいや、お三方、王族やメイドが魔王討伐に参加していいんですか？

そして隆也、いつまでくっついていくつもりだ。

「隆也、離せ。あれくらいいたいかな？」

私がそう言うと、隆也はぱっと私を離れた。

あれ、とは後日紹介するかもしれない。

「紫苑、お前なんでこんなところにいるんだ？」

「疲れたから宿取りに」

「それだけ？」

「しいて言うなら、魔王の居場所にいくルート上にこの町があったから」

隆也がため息をついた。

……私はなにか笑えない冗談でも飛ばしてしまったのだろうか？

「もう寝たいんだけど」

「お、じゃあ俺たちが金出すよ。ピュティアたちと相部屋だけどいいよな？」

「いいよ」

もう寝たい、一刻も早く寝たい。
けど現実には甘くない。

結局私は夜遅くまでピュティアと対談しなければならなかった。

【対談】

王女とティナリイとの相部屋で、私は王女に詰め寄られていた。

「シオン様は、なぜあんなにも勇者様と仲がよろしいのです!？」

「……幼馴染だから。もう寝かせて」

「駄目ですよ! まだまだ聞きたいことがありますわ!」

ああ、勘弁してほしい。

いつそのこと王女も眠らしてしまおうか。

ティナリイは幸せそうな寝顔で眠っている。

「勇者様とはどんな関係ですよ!？」

「……幼馴染」

「いいえ! 恋人なんて許しませんわ!」

そんなこと一言も言っていないよ、馬鹿王女。

「とにかく、勇者様は私のものなのですから! 近寄らないでくださいまし!」

近寄って来てるのは隆也だよ、馬鹿王女。

「あと、さっき抱きしめたのは何ですよ!？ 女性として恥じらいが足りないんじゃないやありませんの!？」

抱きしめてきたのは隆也だよ、馬鹿王女。

「ああ、わたくしの隆也様に手を出そうなんて、成敗してくれま
すわー!」

勘違いもここまで来ると、拍手を送りたくなるよ、馬鹿王女。
馬鹿王女は馬鹿らしく、詠唱始めた。
もう相手にもしてらんない、私はとてつもなく眠いんだ。

「<^{フェイ}気絶>」

馬鹿王女は私のベッドから転げ落ち、床に転がった。

馬鹿は朝までそのままでいてる。

私は安眠を手に入れることができました。

【紫の村】

次に向かうのはナバユ、別名紫の村。

いかにも私の血縁者がいそうな村じゃないか！

私たちは今魔車に乗って、その村へ移動中だ。

魔車とは、魔力で動く車だ。

馬なしで走る馬車を想像すると分かりやすいだろう。

ティナリイが操縦席に座って、それ以外は馬車の中だ。

しかし、ものすごく気まずい雰囲気だ。

王女が昨日私に虐められて体が痛いとかで、隆也といちゃついている。

私の安眠を邪魔したお前が悪い！ と突っ込めず、王女の甘い声だけが馬車の中で響いている。

このままでは心臓に悪い、なにか話題が……話題が……。

「お、王子、1つ聞いていいですか？」

「はい」

「アテ力では、旅人はみんな魔王とみなされるのですか？」

「いいえ。おそらく、シオン様が紫の髪と瞳を持っていらしたからだと思います。あの村は、80年前の魔王に家族を奪われた人達が集まって出来た村ですから」

「人違いなのに、あれだけ憎めるものなんですね……」

80年経っても、あんなすごい老人を残すんだから、魔王は一体どんなむごい殺し方をしたんだろうな……。

ていうか、魔王って私と同じ髪色だったなんてね。
意外な共通点発見。

「見えてきましたよ。ナバユです」

おお、やっとこの重苦しい空気から脱出できるのか！
魔車から下りて、新鮮な空気を吸う。

「では、私は魔車を預けてきます」

ティナリイが魔車をどこかに持っていった。

『魔の森』は深い森なので、魔車は使えないのだ。
そしてティナリイは戦えないメイドさんなので、この村で留守番だ。

王族2人は準備だとかでいないので、戻ってくるまで村の入口で待機していた。

この村、さすが紫の村というべきか、ほとんどの人が紫の髪と目を持っている。

私と似ている人いないかな、と思っていたと、1人の老人が近づいてきた。

髪はもうないので分からないが、目は紫だ。

「シルファ……？」

……シルファって誰でしょうね。

「人違いです」

「顔を見せておくれ」

おじいさんは、老人に似合わぬ怪力で私の顔を振り向かせた。
首がゴキッていったよ！ 折れちゃったらどうしてくれるんだ！

「やはり……シルファに似ておる……」

「人違いだ！」

「……そうかもしれぬ。80年も経っておるからの……」

「あんたは誰だ？」

「わしは……いや、なんでもない。すまぬな」

おじいさんが去って行つた。

あのおじいさん、なんだったんだ……？

「おい。出発するぞー！」

隆也が私を呼んだ。

「今行く！」

さて、魔王の顔を踏み倒しに行くのでしょうか！

【紫の村】（後書き）

次は魔王来ます

【魔王】（前書き）

やっとまともなボスが登場！

【魔王】

ナバユを出てすぐ、村の方から轟音が聞こえてきた。
振り向くと、村からは火柱が立ち上っていた。

「村に戻りましょう勇者様！」

ピュティア王女が隆也の腕を掴み、そのまま走って行つた。
私もロックス王子もすぐに後を追いかけて、村の前まで来た。
燃え盛る炎から逃げ惑う人々の中に、1人だけ異質な存在がいた。
漆黒の外套を纏い、のぞいている手や顔は病氣的なほど白い色をしている。

だが、その肌には、目や口などのパーツがところせましと生えており、目は涙を流していたり、口は叫んだりしている。

ふらふらと酔っ払いのように体を揺らしているその存在は、世の醜悪を全て集めたかのように醜い。

ロックス王子が、魔王、と小さく呟いた。

確かに、叫んでいる内容は全てばらばらだが、まさに負の感情の集合体だ。

突然、魔王が視界から消えた。

グシャッという嫌な音がして、私の隣にいたロックス王子が後方へ吹っ飛び、逃げていた人を巻き込んで炎の中に突っ込んだ。

ピュティア王女が悲鳴を上げた。

隆也は剣を鞘から引き抜き、魔王に斬り付けた。

魔王はそれを片手で受け止め、開いている方の手を隆也の顔の前で広げ、魔法陣を展開させた。

魔法陣から吹き出た真っ黒な炎が、隆也を包んだ。

ピュティア王女はがくがくと震えていて使い物にならないので、私が水の魔法で魔王の炎を相殺した。

すると、魔王は大剣を出現させ、私に刃を向けた。

私がつさに黒い膜、結界を張ると、大剣を弾いてすぐに消えた。斬り付けられては結界を張り、そして壊される。

それを何度も繰り返していると、ふと、ある疑問が浮かんだ。

こいつ、本当は生物ではないのか　と。

城で聞いた話では、魔王も魔物の一種、生物ではないはずだ。

しかし、魔王の動きはだんだんと鈍くなっているし、肩で呼吸をしている。

負の感情のみで形成された魔物が疲れを感じるとは考えにくい。

もしかしたら、私は人殺しをしようとしているのではないだろうか。

いや、私たちは魔王を倒さないと元の世界に帰れないのかもしれないのだ、何が何でも倒さないと。

私は魔王から距離を取り、倒れている隆也を起こそうとした。

だが、起きない。

冷や汗が私の頬を伝った。

ロックス王子は火傷でボロボロだし、ピュティア王女は魔王の餌食になって地面に突っ伏している。

まともに動けるのは私だけだ。

地面を蹴る音がして顔を上げると、魔王が大剣を振り下げようとしていた。

油断した。

魔王の大剣は私の肩から胸を切り裂き、私の視界が真っ赤に染まった。

あれ？　前に一度、この感覚を感じたことがある。

その時、私の中で全てのピースが繋がった。

【紫の魔王】（前書き）

遅れました！ スミマセン！

【紫の魔王】

紫苑の声が聞こえた。

火傷で痛む体を起こし、声のする方を向いた。

そこには倒れている魔王と、狂ったように高笑いを上げる紫苑がいた。

状況がまったくつかめない。

「紫苑が、魔王を倒したのか？」

紫苑は高笑いをやめ、俺を見た。

「ああ、そうだ。私が殺した」

紫苑は倒れている魔王を蹴飛ばした。

纏っているオーラが全然違う。

不意に、逃げ出したい衝動に駆られた。

紫苑は俺のそんな気持ちを感知取ったのか、くすくすと笑い、俺に顔をぐっと近づけた。

「大丈夫、まだ殺しはしないよ。まだ……ね」

紫苑が顔を離した。

「お前は……何なんだ？」

「そうだな、人間で言う魔王ってやつ？」

「魔王はそこで倒れてる奴だろ？　なにがあっただんだ紫苑！？」

突然、腹部に痛みが走った。

空と地面が何度も入れ替わり、空を見上げている状態で止まった。紫苑に蹴られて吹っ飛ばされたんだろう。

俺の脳は、混乱しすぎて逆に冷静になっていた。

顔を動かして紫苑を見ると、冷やかな目で俺を見下ろしていた。

「ほんとに無知だな。周りに言われるがままに魔王を殺す……ほんとに愚かで、馬鹿な勇者様！」

紫苑が手を伸ばし、何かを握る動作をした。

すると、俺が全く呼吸が出来なくなった。

視界がどんどん黒ずんでいく。

「勇者のくせに『破魔』が無かったんだよね。ふふっ、好都合だ。このまま死」

「そうはさせません！」

「やられっぱなしでは王子の名が廃る」

俺の肺に酸素が流れ込むようになった。

ピュティアが魔法を解除したんだろう。

俺の前に、ピュティアとロックスが庇うようにして立った。

「王子に、王女……忌々しい血だ。消してやりたいところだが、生憎お前たちより優先すべき事があるのでね。今度死合う時は、大きな花火を用意しておこう」

意味深な言葉を残して、紫苑が消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4480v/>

紫の記憶喪失魔王

2011年10月14日23時25分発行